

ピアノを通じた表現指導の試み

—バイエルからブルグミュラーへ、表現する喜びを知るために—

An Experiment in the Teaching of Expression Through Playing the Piano

—Know the Joy of Self-expression—

渡邊 さらさ

Sarasa Watanabe

岩佐 明子¹

Akiko Iwasa

目 次

- I はじめに
- II 『バイエル』と『ブルグミュラー』の特徴
 - 1. 『バイエル』の特徴
 - 2. 『ブルグミュラー』の特徴—表題の有無
- III ピアノ指導の現状と保育士・幼稚園教諭に求められる表現力
 - 1. 学生のピアノによる表現力の現状
 - 2. 保育士・幼稚園教諭に求められる表現力
 - 3. 保育者養成校におけるピアノ指導のありかた
- IV 研究内容
 - 1. 『狩 La chasse』と『バイエル』90番
 - 2. 『バラード Ballade』
- V 考察とまとめ

I はじめに

F. バイエルⁱの『バイエルピアノ教則本 Vorschule im Klavierspiel Op. 101』ⁱⁱ（以下『バイエル』）は日本においてピアノ学習のための定番の一冊として広く使われており、多くの保育者養成校でピアノ指導書として使われている。また、J. F. ブルグミュラーⁱⁱⁱの『ブルグミュラー 25の練習曲 25 Leichte Etuden Op. 100』^{iv}（以下『ブルグミュラー』）も、長年多くのピアノ愛好者に親しまれると同時に保育者養成校においては『バイエル』

1 大阪音楽大学演奏員、東海学園大学非常勤講師

を修了した学生に演奏され続けてきた。

ピアノを学習する上で身につけなくてはならない能力として、読譜力、ピアノを弾くための技術力、また表現力などが挙げられる。しかし、実際のピアノ指導現場では音やリズムを正確に弾くこと、など読譜や指を動かす技術的な問題だけに終始してしまい、音楽的な表現をする、というところにまで学習者の意識がいかないことがほとんどである。

そこで本稿では、表現力を身につけるという目標を達成させるために、2008年度から2010年度にかけて筆者らが担当した保育者養成の学科を持つA短期大学、B大学における「音楽Ⅰ」または「音楽Ⅱ」での授業実践をもとに、『バイエル』と『ブルグミュラー』をあらためて教材研究し、学生の指導をおこなってきた結果を考察していく。

Ⅱ 『バイエル』と『ブルグミュラー』の特徴

『バイエル』が保育者養成のためのピアノ指導書として数多く編纂されてきたこと^vでも、保育者養成校で長くに渡り、教材として使われてきたことがわかる。また、『ブルグミュラー』も多くの保育者養成校の教員により、その指導法や演奏法の研究が紀要に取り上げられていることから『バイエル』と同様に保育者養成校で扱われてきたことがわかる。

この『バイエル』と『ブルグミュラー』の指導書としての特徴を以下に簡単に触れる。

1. 『バイエル』の特徴

(1) 読譜の練習

片手で1音ずつ押さえる練習から入り、1番から53番までは両手ともト音記号で書かれている。54番から62番にかけて曲の1部にヘ音記号が現れ、65番からの左手は基本的にすべてヘ音記号で書かれている。『バイエル』前半をト音記号で書かれている音符を読めるように学習し、徐々にヘ音記号を読む力を身につけていけるように初心者のための工夫がみられる。

(2) 指の独立

1番から45番までは、手を5度のポジションに固定したまま全ての指を機能的に等しく動かせるように作曲されている。それぞれの指の独立を目的に、5度の範囲で作られた練習曲のため、歌曲的なメロディーは少ない。また、18番以外では和音が使われておらず、初心者は和声を感じる事が難しい。初心者の学生は、両手で複雑な曲を演奏する時でも、横のメロディーとして感じずに、次にどの指を出すかという運動のみに終始する傾向がある。

(3) 和声

46番は左手に初めて6度が示され、Vの和音の第一転回形が見られる。46番からはメロディーとハーモニーからなるホモフォニーの曲が多数見られる。和声はI、IV、

Vが主に使われており、単純な作りになっている。

(4) 表題

全ての曲は、番号が付せられており、全106曲に表題が付いていない。

2. 『ブルグミュラー』の特徴－表題の有無

『バイエル』でト音記号、ヘ音記号の読譜、指の独立、基本的な和声（I、IV、V）を学び、ある程度、自分の思い通りに指を動かせるようになった初心者は、「音程の一番広い所で7度という適確な運指法を持って創られている」^{iv} 『ブルグミュラー』を次のピアノ指導書にとりあげることが多い。『バイエル』と『ブルグミュラー』との最大の違いは、表題の有無である。

『ブルグミュラー』の表題^vは、版によりさまざまな形で訳されているが、全音楽譜出版社から出版されている北村の訳を中心に考えた時、訳の種類は、次の3種類に分けて考えることができるだろう。

具体的で今の学生が理解しやすいものとして、「小さなつどい」「せきれい」「清らかな小川」「おしゃべりさん」「つばめ」「乗馬」「天使の合唱」「再会」が挙げられる。ものごころを表しているものや、感情を表しているものとして、「すなおな心」「無邪気」「進歩」「優しく美しく」「やさしい花」「別れ」「コンソレーション（なぐさめ）」「ちょっとした悲しみ」「気がかり」が挙げられる。そして、『ブルグミュラー』が作曲された1851年という年代、またドイツやフランスの歴史的背景、風土の理解が必要となってくるものとして、「アラベスク」「パストラル（牧歌）」「狩」「シュタイヤー舞曲（アルプス地方の踊り）」「バラード」「アヴェ・マリア」「タランテラ」「バルカローレ（舟歌）」が挙げられる。

Ⅲ ピアノ指導の現状と保育士・幼稚園教諭に求められる表現力

1. 学生のピアノによる表現力の現状

学習者にとって、表題の付けられた『ブルグミュラー』は、初歩的な技術を研く目的だけでなく、具体的な表題イメージを音楽に生かし演奏することを目指すことができ、より深く音楽の喜びを知ることができる。しかし、個人差はあるものの、実際のピアノ指導現場では音やリズムを正確に弾くこと、など読譜や指を動かす技術的な問題だけに終始してしまい、音楽的な表現をする、というまでに学習者の意識がいかないことがほとんどである。

2. 保育士・幼稚園教諭に求められる表現力

保育の中で子どもの音楽的経験は「感じる心を育てるため」^{vi} に必要であるという。また、感じる心を育てるために保育者にできることは、「子どもたちのつくった音や音楽

に共感し、ともによろこべることだ」^{ix} という。子どもたちの音楽に共感したり、ともによろこんだりするには、まず保育者自身が「感じる心」を身につけていてなければならない。感じる心があると、そこに音楽は反映されてくる。そこに技術の良し悪しはあったとしても、感じる心は音に映し出されてくるものだと筆者らは考える。

3. 保育者養成校におけるピアノ指導のありかた

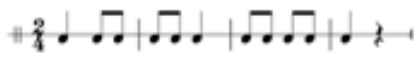

感じる心をもって、その心をピアノの音で表現するには、具体的にどのような指導を行っていくことが望ましいのだろうか。

昨今の保育者養成校の学生はピアノの経験がなく入学してくるケースが少なくない。読譜力に関するアンケート調査結果から見ても、音楽能力全般に自信を持っている学生は多くない。

A 短期大学入学生の入学時点でのピアノ経験に関する調査（渡邊）

	ピアノ経験なし	1年～4年	5年以上
平成21年度入学生	10名 (37,03%)	8名 (29,62%)	9名 (33,33%)
平成22年度入学生	13名 (41,93%)	9名 (29,03%)	9名 (29,03%)

A 短期大学平成22年度入学生の読譜力アンケート調査（渡邊）

質問事項	「はい」	「いいえ」
ト音記号の音符は読めます	21名 (67,74%)	10名 (32,35%)
ヘ音記号の音符も読めます	18名 (58,06%)	13名 (41,95%)
簡単なリズムなら読めます 	21名 (67,74%)	10名 (32,35%)
複雑なリズムも読めます 	7名 (22,58%)	24名 (77,41%)
何の事を言っているかさっぱりわかりません！	10名 (32,35%)	21名 (67,74%)

実際のところ、ピアノの初心者が楽譜から音楽のイメージを明確にさせていく能力を身につけるまでには大変な時間と労力、学習と訓練が必要である。しかし、それとは別にピアノを通して表現する喜びを知るという体験は、保育者の音楽表現活動の一助になっていくだろう。

一般的に初心者へのピアノ指導では技術をつけるための指導に偏りがちである。しかし指導者は、学生には自発的に個々に持つ音楽イメージを表現するために練習する、という意識を促す指導をしていきたい。

IV 研究内容

1. 『狩 La chasse』と『バイエル』90番

【譜例1】『バイエル』90番冒頭の譜例

【譜例2】『狩』冒頭の譜例

『バイエル』を修了した学生に、『バイエル』90番と多くの共通点が見られる『狩』を課題として与えた。この2曲においては以下のような共通点を挙げることができる。

- ・ハ長調、6/8拍子
- ・アウフタクト（弱起）で始まる前奏
- ・リズムの形態（4分音符+8分音符）
- ・ホルン5度の使用^{*}

また、『バイエル』90番および『バイエル』の中では見られず、『狩』に見られる新たな点（2曲間の相違点）として次の点が挙げるすることができる。

- ・表題の有無
- ・『狩』には速いオクターヴ跳躍がある
- ・c-moll部分、右手3度の移動と左手の音型（21小節～）
- ・転調が頻繁に行なわれる^{xi}（C: → c: → C: → a: → C:）

(1) 多くのレッスンに見られる傾向

『狩』のレッスンにおいて、学生は、読譜はできても音楽を自発的に表現すること、またそれを楽しむという域に達していないことが多い。その理由に、『バイエル』との相違点として挙げられるオクターヴ跳躍が技術的に未熟で弾ききれないこと、また、表題からの音楽的イメージが乏しい事などが挙げられる。イメージが足りないために、

リズムに躍動は感じられず、およそ『狩』という表題からイメージされる音楽とはかけ離れた演奏になってしまう。

(2) オクターヴ跳躍の指導

まず、技術的な問題を克服する。

【譜例 3】『狩』5～12 小節の譜例



学生は、右手の8分音符を重くゆっくりと弾く事が多いため、軽快なリズムを感じピアノを弾く楽しさを気づかせるために、以下のような指導をした。

左手のメロディーを指導者が弾き、学生に右手のパッセージを様々な擬音語（パンパンパン、タンタンタン、ダンダンダン、ポンポンポンなど）で歌わせた。その際、楽譜をよく見るよう促し、スタッカートの記されていることをきづかせ、ふさわしい擬音語は何か再度問いかけた。また、スタッカートの意味を確認し、音を短く切る事に終始するのではなく、「音を弾ませる」というとらえ方がいいのではないかとアプローチした。すると、学生は擬音語を口にしながら弾くことに挑み、この部分での軽快なリズムを理解したようであった。再度ピアノを演奏させると、右手を弾ませようとしていた。

(3) 表題からの音楽的イメージの指導

『狩』という表題から、学生の表現意欲を高めるように導きたい。ある学生に曲に対するイメージを問うと、「明るい元気な曲」という返答があった。もう少し具体的な発想を求めたかったがここでは否定せず、ブルグミュラー自身がつけた『狩』という表題に注目させることで、何を思うかもう一度問い、『狩』という言葉から何が連想されるか、イメージを膨らませて曲に対する興味をかきたてるように促した。すると、「猟師の男が1人で鉄砲を持って山の中に入り狩りをする」と断片的な物語風の発想が得られた。次に、先ほど練習した右手のオクターヴのイメージを問うと、「小動物(キツネ、ウサギ)の駆ける様子」と答えたので、「駆けている様子ならテンポは速いよね」という助言を与えると情景のイメージが出来た様子で、そのように弾こうと試みる様子が見られ、曲に対する学生自らのイメージを自身の中に確立したようであった。

また、『ブルグミュラー』にある北村の校訂・解説によると、ホルン5度（文末脚注ix参照）は「遠くから聞こえてくるホルン（狩の角笛）の音で始まり、それは遠くからだんだん近づいてくる」とある。これを一読することで、学生は納得し、さらに

イメージを膨らませたようであった。

ただやみくもに弾けない箇所を練習するのではなく、イメージする音楽を明確にし、理想に近づけるように練習したいという意欲がうまれたことで、どのように練習すべきか考慮する様子もみられ、練習の意義が深まったようであった。

2. 「バラード Ballade」

ブルグミュラー作品に数曲ふれ、技術的にも成長が見られる学生に対し、物語的な要素をより多く含み、ドラマチックに音楽構成された『バラード』を与えた。

【譜例 4】『バラード』1～4小節

Allegro con brio (♩.=68~76)

p misterioso

(1) 多くのレッスンに見られる傾向

3、4小節目がスムーズに弾けない。また、「バラード」という言葉に対する知識が不足しているため、どのような音楽表現をして良いか、わからない様子である。

(2) 3、4小節目左手パッセージの指導

問題点として、素早く複雑に動く左手のパッセージは、『バイエル』または『25の練習曲』の『バラード』以前の作品にはあまり見られないため、技術が追いつかず、テンポが遅れてしまい、左手がメロディーだという事を認識していても、左右のバランスが悪くなる事が多い。

左右の音量のバランスは左が弱くなるため、左手がメロディーであるという事を認識させて、左手の指4、3、2にそれぞれ意識を集中させ（独立して運動する事をイメージさせ）練習させる。

1～4小節の右手を一定のテンポで、片手で弾かせ、それに合わせて左手を階名唱で歌わせる。字にそのテンポで、右手を膝打ちさせながら、左手を弾かせる。片手だけ音を出すと、両手で弾いた時より集中して音を聞くことができ、両手で弾く困惑がないため、一定にテンポを保てるようになる。

(3) 表題からの音楽的イメージの指導

『バラード』という表題に、どのようなイメージを持つか学生に尋ねたところ、「ゆっくりの曲」「おらかな感じ」「少しせつない感じ」といった返答が得られ、いずれも抽象的であった。

『25の練習曲』北村校訂・解説によるとこの『バラード』は「音楽の中に、物語性、ドラマ性など、ある種の文学的要素や想像力が必要とされる『ロマン派』の特徴が最も如実に現れる」作品である。

『バラード』という言葉は、時代や国により捉えられ方が違うため、定義づけが難しい（英語－バラッド、独語－バラデー、仏語－バラード）。『バラード』は楽語辞典や一般的な国語辞典でも書かれている内容はいろいろであるが、ここに以下の辞典と辞書から大意を引用する。学生の「少しせつない感じ」というイメージは下記の5)の影響と思われる。

参考図書：「新音楽辞典 楽語」1977、音楽之友社

「広辞苑」岩波書店

- 1) 12世紀ごろ、イギリスの通俗的歌曲を「バラッド」と呼んだ。
イギリスで中世以来口頭伝承されてきた物語的・叙事的な内容の歌謡。
イタリア語の〈ballare 踊る〉から派生した語
- 2) ドイツでは、非常に芸術的に洗練されたもので、おもに中世の歴史上あるいは架空の出来事やロマン的な物語を扱い、しばしば音楽化されて、通常は通作歌曲の形をとった。
- 3) 19世紀のイギリス上流社会などで歌われたセンチメンタルな歌曲のことをバラッドといった。
- 4) ショパンとブラームスは、19世紀の性格的小品として3部形式のピアノ曲にこの名称を使った。譚詩曲と訳されることもある。〔譚詩とは故事、伝説などを題材とする近代の詩形。物語詩〕物語的・文学的な雰囲気器楽曲。
- 5) ポピュラー・ソングのなかで感傷的なラヴ・ソングのたぐいをバラッドと呼んでいる。

そこで、この『ブルグミュラー』で『バラード』という表題が使われた流れである4)の「伝説などを題材とする近代の詩形。物語的、文学的な雰囲気器楽曲」という項を説明し、もう一度学生に発想を促した。また、イメージを膨らませる為に指導者の演奏を聞かせ、学生の感想を聞いた。

(4) 学生との対話から発展した「バラード」のイメージ

以下は、上記のレッスン内で行なわれた指導者と学生の間で、ピアノを離れ対話の中から出てきたイメージである。

- ・冒頭部分は不気味な夜 (misterioso)。背景は厳かな古城。
- ・おそろおそろドアを開けるとそこには……！（左手テーマ部分）
- ・一夜明けて、昨晚の悪夢は夢だったかのように晴れ渡った青い空、若い新緑に包まれた美しい古城。（対照部）やがて暗雲が立ち込めて、怪しい雰囲気に。
- ・再び、不気味な夜。あの晴れ渡った空の下にそびえたつ美しい古城は幻？

- ・城主が現れる（ドシドソラシのユニゾン）。何をする術もなく立ちすくむ中、一步一步と冷静に近寄ってくる城主。「ギャー」（襲われた）

前述のように『バラード』という表題は明確な意味を持たないが、「物語的、文学的な雰囲気のある器楽曲」である。この学生との対話から生まれたイメージが、作曲者の意図するバラードのイメージであるか否かはわからない。しかし、「不気味な夜」を表現しようとする冒頭左手のパッセージ、「ドアを開けるとそこには……！」何かがある驚きのアクセント、場面展開した美しい昼間の古城、など、この対話の後、明らかに学生が音を介して何かを表現しようとする姿勢が見られた。

V 考察とまとめ

自らの技術が未熟である事を自覚し、ピアノが弾けないと思ひ込む事から、音楽に対して苦手意識を持つ学生は少なくない。また、養成校の授業という限られた時間の中で、ある程度の進度も求められる為、指導者も学生の技術の未熟さのみに注目して、技術的なことばかり中心に授業をすすめてしまいがちである。

しかし、ピアノを演奏する本来の目的は、音を並べるのではなく、音楽を表現する事である。北村は「本当の技術というものが、決して単なる指のメカニズムではなく、『音に想いをこめる方法を知っていく』ことなのだ」ⁱⁱと述べている。養成校において限られた時間で行なわれるピアノ指導も当然、例外ではない。

表現する事の喜びを感じるためには、一旦ピアノを離れ、表現したい音楽的イメージを頭の中で膨らませるといった事も必要なのではないだろうか。そのような時間を持つ事で、学生の自発的な表現を目指す意識付け、また能動的であり積極的な姿勢を引き出す事が出来ると思われる。学生が能動的に自らの表現したいイメージを描くことができれば、技術の有る無しに関わらず、理想の演奏に近づくために喜びを持ってピアノに向かうであろう。

本稿では、表題からの音楽的イメージをふくらませ、学生が何か心の動きを表現しようとする心を芽生えさせることを目標においた授業の事例を考察してきた。学生の心のうちに湧くイメージ、それをピアノで弾きたいという意欲を引き出すために、音楽表現の喜びを感じてもらうためには、指導者は常に様々なアプローチが必要であろう。

注

- i Ferdinand Beyer (1803-1863) ドイツの作曲家。日本には明治13年にアメリカ人によって紹介された。
- ii さまざまな出版社から発行されているが、本稿では以下の出版物を中心に考察していく。
バイエル『標準バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社、
- iii Johann Friedrich Franz Burgmüller (1806-1874) ドイツの作曲家。ピアノ教師として人気があり、

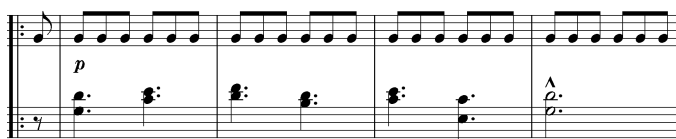
渡邊さらさ、岩佐明子

600 曲以上のピアノ小品を残した。

- iv さまざまな出版社から発行されているが、本稿では以下の出版物を中心に考察していく。
ブルグミュラー『25の練習曲』北村智恵校訂・解説、全音楽譜出版社、1998年
- v 三好優美子「バイエルピアノ教則本 抜粋テキストにおける編纂についての調査報告」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第45号 2010年
- vi 中村礼子「ピアノ曲ブルグミュラー Op. 100 に見る演奏技法 No. 1: クリストフ・エッセンバッハの演奏を参考例とした考察」国際学院埼玉短期大学研究紀要第26号 2005年3月
- vii 本稿で中心にみてきた前掲書、北村とは別に、春畑セロリ『ブルグミュラー 25の練習曲』音楽之友社(2005)と比較すると、曲によっては「再会」が「帰郷」、「ちょっとした悲しみ」が「ちょっとびり不満」など違った印象になってくるものも多い。
- viii 花原幹夫編『保育内容表現』p 97 北大路書房、2009年
- ix 前掲書 花原
- x 「ホルン5度」ホルン5度の譜例



『バイエル』90番-9小節から12小節にみられる左手のホルン5度



『狩猟』-5小節から8小節にみられる左手のホルン5度



- xi 『バイエル』の中では、長調から短調への転調は『バイエル』105番にだけ見られる
- xii 前掲書 北村 p 6